花乃宴

女訓をしるせり

源氏十九 宰相中将正三位

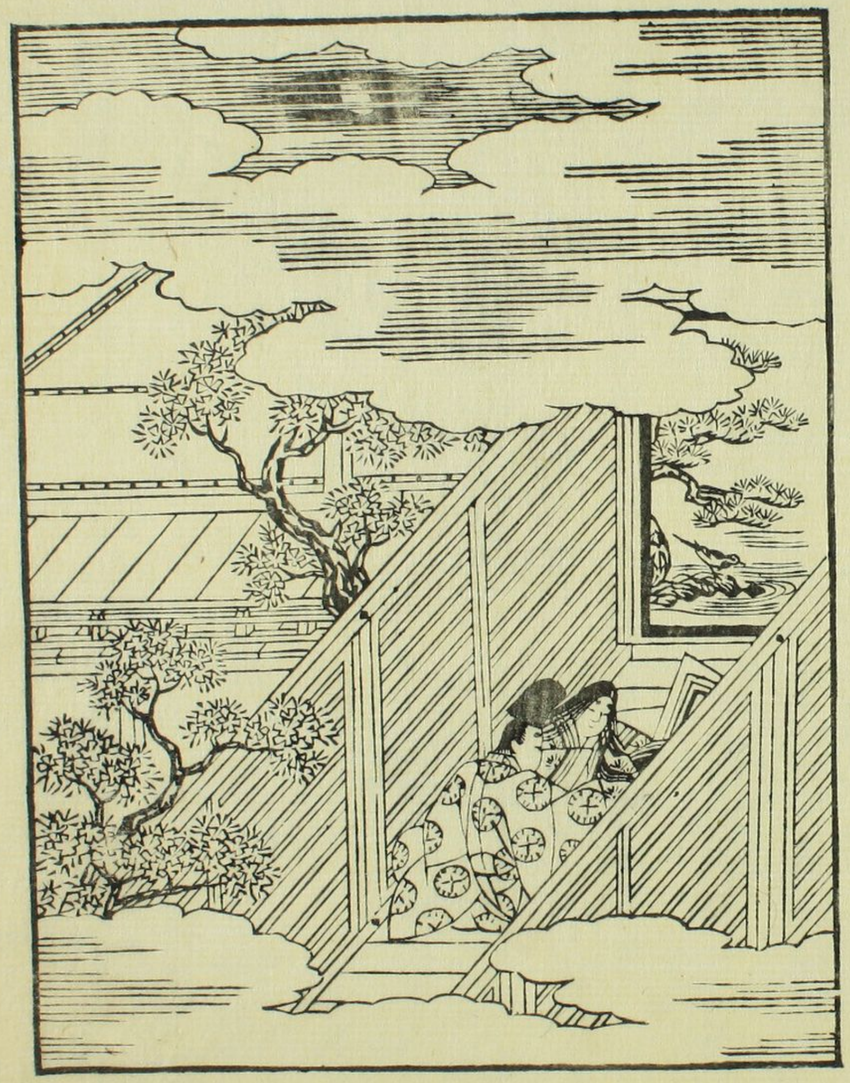
さきさうぐうのうちにあまり南殿の桜のえんせき
を給ふ春宮の御つぼね右はしにまうのぼり
給ふ弘徽殿の女御中宮のうへおはすると折ふし
ごとにやさうぐうもをぼえまさりたまへるすぐ
れたまへりしかど世にくゝれて愛敬なき
のゝしるしにやかくてこそ上達部あまたうし
ろめたくおぼしたのいとゝれぶむみん詩作文作
り給宰相中将春とうのもとのゝ
ゝしさ人れいの人なとゝなりうつくしき中将人のめう
けしきもうるはしくおぼゆべくめれどいとめやすく
もてこゝろにくしとまくもぞれ

しうぎてのんぐいこれおうぐちるぐれぐろめる
ぬりぢげの文人へいまってけれど芸安のけぐて
うくすぐれておりまるうるうるやむごと
なきへぬくもれしぢころなるよぐげうをと
てぐろぐぐとうちりたるさ庵よ立野ろ紅ぐてうる
うてやもさ程のことなれどうるうげなりぐて
老ろうるせどものなりおやちくやつれてきいるれ
しうも衰るさ庵ぐゆうんずうなんおううりけうぐ
くどもちすぐいさうるよもいうずぐてのへさせうまへり
やうく入日なする程よ春の鶯さしづといふ舞いと
おもしろくゆうよ源氏のけ紅葉のなりかば

しぢれて芸安ぐうるうぐ庵いきてをちるせめの
し庵いするるのぐれぐさうてぐちてのぐるよ袖へ
ぬ有をひとなれ気色ぐうまひのへるよいぐさも
のるくゆ左のなるぐうめうさも忘れて泪おと
し給ふ中ねいづくてとあれば柳芸苑といふ
舞をこれい今をそうちすぐてうるこや
もやと心づひやもけんいと面白れいけ衰なり
ていとめづくさうるへさへうんぐちめられ
うぐれてまひのへぐ衰よへていとるうぐめもう
ずおうちなぐうずるよも源氏の男のけをばううぐ
もえやうで白ぐとるぐどのうちうせどものなる

をいうぶこうこうやうのおりよりまげこの孫をい
光ゆうしのへべこうどもいうでうをろうよばされん中家
落つる涙に
れめれとまろよつけて藤家の妻のあかぐちよう
ろこ給ふんもあやしうやがうやふまろうし
とぐこびうこうもばしうへされけ
落つる
大ろこよ菅のそぐさをこまーうぶ百も心乃
どれまーやいれ心地のうちちりけんこと。いうでまり
よけん喪いろうもけてたんごくてけろ上達ア
其くあぐれ給藤家うへこせのひぬれぐのとや
うよりめるよ有いくあろうこいでおうこき
を源氏のえんひぐちるこすぐーぐくばこ給

それぐ侍へのへぐもうちやすこてうやうよおまひ
けあ有よーこうめべこひまやあるとふぐう
つぐわうをりケうう更びてうぐひりけど。
ろうこべきこぐちもこてぐれぐうちちげき
てなをあぐよ弘徽殿のほそどのよ立より給
へれば三のうちあこうこ弘徽殿へのれつぐれよや
ぐそまうのぐりまひよそれぐへずくちるそひ
ケりおくのうろどもあるて人をとまもずやや
うまて世中のあやまちいすこぐうこと心てや
こうのぐりてのぐこ給へられるべーいとま
こうおうーげるこえのうすべての人とは学しぬ。



ゆびろづさまのまみあろ袖ぞなさとうちずじて
ちるるさ庭よろもれがいとうれしておと袖と
とうへ給女おそろしとおもへる気色(けしき)まして。なかむく
つけうそうそとのもへど。なすようとまうさとて
あるさ衣(あれ)のそをさるもへ有のおばろけか
らあ嫁(ちぎり)とで思とてやすふぐさろしてどいを
して付おさま(女)しさまあられうさ庭(係)ふとろ付
ううおうしげなりゆる(女)くくろよ人のとのもへど
まろいこれ人よゆろられられぐめしてせうろとも
でうことうあうんうぐ思(たのび)てうそとの給こ思よ(女)ば
ものうろとぐ(さく)めていうとうなぐさえんろう

びしとせくるもれうをせくこと
ういうしごとせくりゐ(原)ひごろや創るるぶり
けんゆうさんこというちかしさよ女もかうさ
女やぶてつうさ心もまうあなるべしら(原)うさ
しとこのみる程るく明(あき)ゆるまばうろあいうて
しかハまして寒ぐくよせひぶれるそし
きすり方(原)をかのりしのへいうぢうさめべ
きうでやうさんとはうりとまなばれど
などのみへど
臂
うさう男せるやうて消(きえ)なが乾(ぶ)れてもなの
系とべとうどうやせくいふさ海えんるまめうさ

うう(原)ぶくうりやうさうしうえうもしれとて
いづれぞと分(わ)のやぶりとうむまるこばくゲハ
らうぶせまうて方ぢぶくうばるてうとか
らずいなるうてもんまするひうまみもを
えいひあへぶ人ぐおうさはぶぶうへのばつ(ば)れる面
いうちぶふ家(けしき)多どるうげくまうへばとかりなく
ておうぶぶうりをううまうりうへてむのあぶうり
つぶうはひとぐおるくううひてどろこうさう
もあればぶうるとうさもううを色をなうされ通(ぶ)びあるとう
れとうきうろひつそれとぶぶあへういり(原)
まそかうまれどれいられぶおううりうる人

の高くかゝ女房のかおとうとこそはあしめ
まゞうるなれぬゝ文六の兄なるゝんうゝそちの家の
小のゝゝ郎中ねのすきめあ四の兄なるゝこそゝとと
ゝゝしゝ中くゝそれるゝまゝうゝばゝまゝすゝうゝおゝう
ゝまゝゝ六い芸文ゝまゝゝそゝまゝけゝんとゝゝろゝざゝ
ゝへゝるをいゝとゝゝうゝもあゝべゝいゝるゝゝどゝゝゝうゝ
ゝゝゝれむ行ゝもゝまゝゝゝ

三ぐり俗にとうもろこしもぬれうちつづれ給いか
ゝていづれとたんらく おとゝぎすとてゝ
とゝうもてなされんもいうまぞやまぎへのなり
毒よくんさぎめはぢかづくるべしさ
ゝとてたづであらんぞいとくちはえ
それいうまきもとなばしかづひてうぐ
とすぐえんもへめ姫玉いうまつれぐなるん
日はなればうてやあんとらうくなばし
やうれたうしの和ぎのくへぐれまてうき
おまうもめうを月をうてて水まうけしる心ぐへ
めなれれど少へなけうしうてなるしう

きまの糸とぐくいひしし毒の心ようくうまへば
せるたうあうらうそすれ方の月の朱
とをまうぐへてとうきつけまて玉のうり菱い教
まもひさうなりうけるくなをとばけ紫ぢも心
ぐうればうらへんとなばして二条院へれ
くあうらまいとうけてげるあひなりて
あいぐやうつくらうくたき心ぐへいとなり
なあ所まううづれ心のまうをまへなんとお
ばをまるひめべしおとこのれをへなれぐ
すへへなれまるとやまぐらんとこをそうたう
うくれ日ぐろのれ物後れとなぐとへたう

してゝぞ給を例のとうちゝう殿をど給
くいとうなるいられてやりるくいまるひまのハ
ぎ葵殿のまれいのふとまこふめんゝ給くず
つれぐとまろびえゝめぐゝされてさうのれこ
とまさぐりてやりうるめる乗ハなくてとう
ひ給おくぐわうりのまひて一日のけうまゝこ
と冥給ごられよゝひまそめいまうのれ世四代
となんゝ行めれどぼうびのやうふとどもるやう
くるぎひぐくものひどもとゝのりてゝまひの
ぎうとなん給ごうつぐゝうくのものぐどども
なるうろほひくゝうゝめゝとくのへ

させめへるけなりおゝれもほどくまひぎめべき
ゆうなんゝ給ゝとゝまこまへぐゝるとくのへ
まこなふゝとも給ぐぎ殿やけぐとまそゝう
なるまくゝたどもをごうくうる弱給ゝうろ
げのゝとうハ柳芸苑まとまうゝいれ例
ともなりめべくゝ給へゝまてゝうゆく去ま
立出させめへうまゝうばせのめいばくゝまや給う
まゝと冥給弁申ねなぐまりあひてぐうん
ませなる氏たけぐうりぐるもまくれどもゝうべ
あくゝてあてび給いと面白ゝれ有明の月ハ
くゝれうゝ雪とゆばゝ出ていと地なげゝ

うちすぐの給、雲客まハうど月ごろと、えてさうざめ
くれば、ひとりなうつ、ぶしこぶれうちをおもこ
ぶもこぶれ給くんまば給くうるくはあれどいづれ
ともたづねごとなゆゆしき給あるうまうづく
くんも人ひろくぶひまづひ給まやまひの世余日。
太の太夜のゆこのそちるよ近ぶんこちはくつ
どへすてやがて夜の巻のえんち給花ざかりの色ま
ちる紙、秋のちりちんとやをくくれうけんを
くれてさく桜二本でいと面白きあうつうつく
ひとまへる夜と交ちのれまぶれ日ぶさちうれ
ちうぶれぶくともれし給とのやうまて何事

もいまめうつうまてたまへり源氏の君まも一日
ぬまそれふめんのついぶでまううし給しうぶ。
おうもればくちりしうまのくちへうと見てて
れこのお将をうてまち給
大食わが宿の菊しかなべての色るばなるハさう
まうう紙まるまうづるおしすう程まてぶへる
そうし給ちうぶかたやとわいきまてわぶと
あのうとくやうまれをまう安ここちなぶもた
ひ出る百ちまればちすべての歌ハやまぶ。さるど
の給ちまれううひちなぶひさつろひまている
うちうはどまうられてぶわう給さうの

うしのこれをてえびでめをさまさるるをいと
どもなどくひさてこれ人いうへのこあるるまあれ
さうあるをみをさるのなまめきさるまて行れ
いりあくるれさ後げいとこなり花のまをひも
けとされて中こしまるはなんなをびるどい
とかもろうさあひてあをさうしかけゆく行よ
源氏のををいうさひをやめる後はまをる
あてまをされをちあをさん殿は女一の宮女三の宮
のおりまるひんぐのとをらるおりてをりあ
あをりををいこるるのつまるあるりてあれば
ううしどもあげりるさしてんをいであるり袖

をちをどをうれ
ひるあるをさうしこをずまげ藤をつぐわるりをあ
しをるるをやまるるをいるうるるれて
まびまをあるりうこれどひれまへまをいうげ
まもくさをあくあををつまどれをあひをくを結
へをあれわをくをくをあ人ををやんをるる
ゆりいうをちあるれどいるるをを後をを結る
おくをるいあるどをををのわるうど
どもをあをあをてるあるをけをひをる
ををだをあいをくをくゆりてをあのをとか
ひいををるやるうちあるまひるるををあるく

ぎりとりけるのいとちとそれいうまめとしてとく
とそれとうるやうりまてやむごとなきされるぐの
ゐなとてそれとどちいたちめまへるなりべしとしも
ゆるまでをとなれどすぐるおうしう堀れ
ていづれなんともわれうちつづれて扇(ちぎ)をとそれ
てうとめみちとうちはとけうるるるひ
なりてうおまへうおやちうも海入るこ
海うどうおといとみるふちあるやあんいら
へとそどうぐ時ごうちなげくけるひとるる
ほりうりてまてごうしてとうしへる

つのぐさらいろさまやまとまどふれはの
うはのみぎやゆゆとたるゆへうとをあてに
の給をえたれどあたるべし
腎　ろろいろふるさたるまをたゆうとりのはな
ろろろまはまろたはやとといをふどれ
たちいとうれしろまれろ